



JAPANESE LANGUAGE EDUCATION METHODS

第 35 回 日本語教育方法研究会
金城学院大学
2010 年 9 月 11 日 (土)

会長 川村よし子

今回は金城学院大学のご厚意により研究会を開催する運びとなりました。是非とも多数の方々にご参加いただけますよう、ご案内申し上げます。

TABLE 1 第 35 回研究会開催について

日 時 :	2010 年 9 月 11 日 (土)
会 場 :	金城学院大学 W9 号館 1 階ラウンジ, 2 階 204 教室
開催委員 :	内山潤 (金城学院大学) 金庭久美子 (事務局, 横浜国立大学)

TABLE 2 開催スケジュール

午前		午後	
9:00	発表者受付 ポスター貼付	2:00	口頭発表開始
9:30	一般受付	3:00	会場移動
10:00	開会の挨拶	3:10	ポスターセッション開始
10:05	会の進め方の説明	4:40	参加者全員で片付け
10:10	口頭発表開始	5:00	講評, 次回開催委員挨拶 閉会の挨拶
11:10	会場移動		
11:20	ポスターセッション開始		
12:50	昼食・休憩	5:30	懇親会

【参加方法】

事前申し込みは必要ありません。直接会場にいらしてください。非会員の方でも会場で手続きをして参加することができます。お誘い合わせの上、ご参加ください。

新規入会 : 3,000 円 (年会費)

当日のみ参加 : 2,000 円

【プログラム】

【午前の部】

●口頭発表（5件）

1. 韓国人日本語学習者の漢字能力について

鄭 聖美（筑波大学）

今日の韓国人の漢字能力の著しい低下は既に周知の話題である。にもかかわらず、実際に彼らの漢字能力がどの程度なのかについてはまだ調べられていなかった。そこで本研究では、都内の日本語学校9ヶ所に在学している韓国人学習者 371 名に「母語での漢字能力」についてアンケートとテストを行った。その結果、母語での漢字能力の平均は、日本語初級で8級～7級、日本語中級で6級～5級、日本語上級で5級～4級であった。つまり、日本語学習開始時点で読める漢字の数は母語でさえ非常に少なく、日本語の上達につれて母語での漢字能力も向上した。また、日本語学習によって漢字への興味は向上しても、漢字への自信はなかなか付かなかつた。よって、彼らを無理に漢字系学習者や非漢字系学習者として扱うのではなく、「今日の韓国人学習者」として捉えると共に、漢字への興味が最も高くなる日本語中級レベルにおいて漢字支援を積極的にを行い、漢字への自信も向上させるべきであろう。

2. 2009年度日本・インドネシア経済連携協定に基づく看護師・介護福祉士候補者に対する事前研修における

日本語研修実施報告—看護・介護の職場に立つ人材に必要なコミュニケーション力構築の試み—

辻 和子・小島美奈子・高田 薫（ヒューマンアカデミー日本語学校東京校）

2009年度 JIEPA 看護師・介護福祉士候補者第2期生 368名の事前研修をインドネシアで4か月、日本で2か月行った。職場で受け入れられる人材育成を最重要課題と考え、職場での対応力を身につけさせることを目標とした。本研修では、①研修期間6か月を4期に分け、授業内容を基礎日本語から専門日本語に段階的に移行した。②聞く力、話す力の養成に重点をおいた。読む力、書く力の養成は、職場で必要な語句、表現、文書を優先した。③看護・介護の場面を想定して文型の運用練習を行った。④膨大な指導項目を、運用させるもの、理解させるもの、提示するにとどめるものに分けて指導した。⑤夜間強化クラスを開き、候補者同士の学び合いの場とし、研修後必要となる自律学習力を養成した。⑥「わからないこと」を相手に伝える習慣、指示の内容を確認する習慣をつけた。⑦説明、感想、意見を述べる活動を通して、考える習慣、思考力、推測力、判断力の養成を行った。

3. JFL 韓国人日本語学習者の漢字 SPOT の分析—誤りの偏りと関連して—

石井奈保美・金 英淑（同徳女子大学校）

外国人日本語学習者の漢字語彙の音声処理能力を測るテストとして開発された漢字 SPOT は漢字語彙に関する即時的処理能力を測定するのに適しているとされるが、加納(2009)に JSL 環境における韓国人日本語学習者の特徴が指摘されているものの、JFL 環境にある韓国人日本語学習者に関する研究は必ずしも十分とは言えない。本研究では、JFL 環境の学習者を対象に漢字 SPOT を実施したところ、いくつかの項目について誤りの回答に偏りが見られた。そこでその誤りの偏りに着目し、学習者へのインタビューを通じて誤りの偏りの原因について漢字の処理過程から分析、考察をした。その結果、本調査で分析対象とした12項目中「生き抜く」以外の11項目について、誤りの偏りは5つのタイプに分類でき、この処理過程におけるつまづきが誤りに影響したのではないかと考えられた。

4. 自己添削とピア・レスポンスの段階的導入による作文授業の試み

平野宏子（吉林華橋外国語学院）

中国長春市にある4年制の外国語大学にて、2010年3月から7月までの後期、日本語専攻3学年4クラスを

対象に作文の一斉授業（1 コマ 90 分を 17 週，1 クラス 30 名弱）を行った。先学期の教師添削に替え，今学期前半で簡単な教師フィードバックによる自己添削，後半でピア・レスポンスを導入した。学期末に行った学生に対する 30 問の質問紙調査から，これらの方法による学習効果を探った。調査の結果，1 回の提出で教師添削と評価を得る方法より，教師マーク付きの自己添削により 2 回提出して評価を得る方法が，書いたものに対する印象を強く受け，好ましいという結果であった。後半に導入したピア・レスポンスは，読むことに関しては，互いの作文から学べると肯定的だったが，添削に関しては，あまりいい意見が出ない，信用できないなど，否定的な意見も見られた。いずれの場合も学生は最終的な教師添削を好むことが分かった。

5. 筑波大学日本語口頭能力 Can-do-statement 試作版の開発と項目の検討

関崎博紀・酒井たか子（筑波大学）

本発表では，学習者の日本語力をよりよく反映し，「話す」コースのプレースメントに用いる Can-do-statement は，どのように記述すべきかについて検討する。そのための一つのステップとして，パイロット調査で用いた設問が受講者全体の日本語力をどの程度反映しているか把握する。まず，Can-do-statement の体系的な記述のために作成した，筑波「話す」スタンダード試作版について述べる。分析として，プレースメントテストとの相関が高かった項目，低かった項目に含まれている記述について検討を加える。分析の結果，相関が比較的高かった項目は，日常生活ではなじみの薄い抽象的な話題ができるかどうか問うもの，「準備をすれば」と明記されているもの，「議論」という形態で話せるかどうかを問うものであった。

●ポスター発表（上記 5 件を含む 16 件）

6. 短期大学における私費留学生への日本語教育の現状

松本明香（東京立正短期大学）

本報告では今まであまり取り上げられなかった短期大学(以下短大)の外国人留学生への日本語教育の現状を述べたい。短大では四年制大学の半分の期間で学業を終える。また私費留学生であるためアルバイトで生活費，学費も捻出しなければならない。筆者のいる短大における，そのような制約から生じる問題や課題，また留学生生活の支援体制と日本語教育の現状を報告し，より充実した指導方法を検討したい。

7. 自己モニターを活用した音声教育とそのための e ラーニング

河野俊之（横浜国立大学教育人間科学部）

現在，筆者らは自己モニターを活用した音声教育の研究を行い，それをより効果的に行うための e ラーニングの開発を行っている。本研究では，それを紹介し，また，その開発の経緯などについて報告する。特に，e ラーニングによって，教室活動を補うことができたり，教室活動を再考することができたりすることについて述べる。

8. 日本語教育を学ぶ大学生は短期訪日研修の現場で何を学んだか—言語・文化への気づきを学習者間で共有する活動への参加を通して—

石井容子（国際交流基金関西国際センター）

国際交流基金関西国際センターでは，海外で日本語を学ぶ大学生を対象とする 6 週間の訪日研修を実施している。研修では，体験交流を中心としたカリキュラムを組んでおり，自律学習支援の一環として，定期的に日本語や日本文化社会についての気づきを学習者各自が記述し，それを学習者間で共有するという活動を取り入れている。この気づきの共有活動の 1 回に，国内の大学で日本語教育を学ぶ大学生が参加することを試みた。活動後の振り返りシートへの記述から，日本側の大学生らは参加を通して，①異文化の理解，②学習者にとって学習が困難な点や学習上興味を持っている点の理解，③活動デザインへの気づきや日本語教育イメージの広がり，④語彙コントロールやサポートの程度など学習者対応が難しい点への気づき，などの学びがあったことがわかった。

9. 留学生の日本語クラスと日本人の中国語クラスとの合同授業の試み

権藤早千葉・平川彩子（久留米大学）

予備教育課程で日本語を学習する中国人留学生の教室活動の一環として、日本人の中国語クラスと交流活動を行った。3つのセッション実施後のアンケートから、非母語話者と母語話者が現実の場面で互いに学び合う場として利用できる可能性が示唆された。この活動はビジターセッションの新たな方法として考えられるだろう。

10. 読解プロトコルのチャンクへの分割の可能性

封 静宜（名古屋大学大学院国際言語文化研究科大学院生）

読解過程において読み手は作動記憶で文章情報をいくつかの意味編成をまとめて高次の単位に構成する。この認知活動を「チャンキング」と呼び、その構成された単位を「チャンク」と呼ぶ。学習者の読解におけるチャンクの質及び量を明確にすることにより、学習者の読解の意味表象を理解するヒントになると考える。そこで本研究では、学習者のプロトコルに基づいて、意味編成の完結感・適切性の観点からチャンクの種類と内容を分類した。

11. Moodle を活用したブレンディッドラーニング授業モデルの構築とその有効性—上級日本語読解 BL モデルの改良—

篠崎大司（別府大学）

本発表では、中上級学習者に対する日本語能力試験 N1 読解対策授業として構築してきたブレンディッドラーニング授業モデルを紹介する。具体的には、1. 篠崎(2010b)を踏まえた e コンテンツの改良、2. 授業実践の報告とその有効性の検証、を示す。検証の結果、アンケートによる学習者満足度調査では、79.3%の学習者が本モデルに肯定的であった。また、テストによる教育効果測定では、平均点で34.5%の向上が見られた。

12. 交流型日本語教室における日本語母語話者のスキヤフォールディングの実態

蜂須賀真希子（名古屋大学大学院国際言語文化研究科大学院生）

1990年代半ば以降の日本の多言語・多文化化にともない、学習は個人内に知識や技能を積み上げていくものであるという考えから、より有能な他者との実践の中で習得されるのだという考え方が広まりつつある。本研究では、このような考え方にもとづいてデザインされた教室で、学習者と日本語母語話者の間にどのような相互作用が起り、理解が構築されているのかを、スキヤフォールディングの観点から観察した。その結果、学習者と日本語母語話者の相互行為がいきづまる要因として、学習者にとってのインプット時の「単語知識の欠如」「聞き取りの失敗」、アウトプット時の「単語知識の欠如」「文法知識の欠如」「情報の不足」「発音の不正確さ」が観察された。

13. 自己モニタリングの基準の意識化を促進する他者評価の在り方

森 仁美（名古屋大学大学院生）・衣川隆生（名古屋大学留学生センター）

中上級日本語学習者の口頭発表に関するモニタリングの基準の意識化、内在化を促進することを目的とした教室活動において、他者評価という活動が、どのようにモニタリングの基準の意識化に関わるのかを調査する。本発表では、他者評価の役割を担うことが、同時に評価者自身の自己モニタリングにもつながる可能性があるのかどうかを分析し、教室における他者評価活動の在り方を探る。

14. 日本語学習の初級段階における、簡体字の影響による漢字の誤用について—漢字圏学習者の場合—

NAZAROVA Ekaterina（京都大学大学院人間環境学研究科大学院生）

漢字圏学習者が日本語の初級段階で学習する漢字の字形は、母語の簡体字と8割ぐらいは同じか極めて近い字形である。そのため、中国語母語話者の場合、字形の違いに気付かず、誤った字形を使うパターンがよく見られ

る。両国の常用漢字表の内、初級に出る字を中心に分析し、簡体字の影響がどの程度現れているかをアンケートで傾向を確認した上で、書道教育を活かした指導法の提案を考察した。

15. 中上級学習者を対象とした「かもしれない」「かも」の用法について

許允瑄（筑波大学大学院人文社会科学研究所大学院生）

「かもしれない」は、基本意味である推量の意味と基本意味から派生されたとされる婉曲表現を中心に多くの場合初級の段階で教えられている。しかし、実際の会話場面では、「かもしれない」の基本意味と婉曲の意味以外に、自分の感情などを表現する際にも「かもしれない」を用いる新しい用法が多く見られる。しかし、このような新しい用法について扱っている教科書はほとんどない。そこで、本研究では、日本語の会話教育に貢献できることを目的として、談話において「かもしれない」と「かも」がどのような意味と機能を果たしているのかについて明らかにする。マス・メディアからの実例をデータとして収集し、日本語教科書で扱われている「かもしれない」の基本意味だけではない、実例に見られる「かもしれない」と「かも」の新しい意味・機能について考察することで、中上級学習者に有意な「かもしれない」と「かも」の用法について考察してみたい。

16. 日本語学習者が「である調」の文体でレポートを書くための練習報告

岡田美穂（九州産業大学）

日本の大学に在籍する学習者は「である調」等の書きことばの文体を用いてレポートや論文を書かなければならない。学習者は留学生用の作文教材を使って書きことばの文体を練習している。ところが、そのような練習をした後であっても学習者は話しことばが目立つ文章を書く。学習者にとってはどのような語や表現がレポート等の文章にふさわしいのかという判断が難しいからであると思われる。そこでレポート等にふさわしい語や表現の感じを掴み、レポート風の文章を書くことを目標として、学習者が「必ず使わねばならない語」を30～70設定し、決められた内容を500字前後書くという練習を行った。練習の結果、学習者の文章はレポート風に書かれていた。

【午後の部】

●口頭発表（5件）

17. 機能的表現を使った会話の教育と評価の試み—中級学習者を対象に—

小笠恵美子・斉木ゆかり・中村フサ子（東海大学）

中級学習者を対象としたクラスで機能的表現の学習及び評価活動を行った結果を発表する。勧誘と承諾／断り、依頼と許諾／断り、苦情と謝罪というテーマで対話相手の設定を変えてロールプレイ、評価活動（自己評価*他者評価）を行った。自己評価は学習動機の維持、評価時間の短縮という利点はあるものの、客観的に自己評価ができない学習者には効果的とは言えない事がわかった。コース開始時と終了時に行った can-do statement の調査結果は、多くの学生が能力の上昇を感じている一方、逆に難しさを実感している者もいることを示している。

18. 「オンライン日韓両言語相互学習システム」における協働翻訳活動の効果

佐藤恵理・鄭 惠先（北海道大学留学生センター）

本活動では、SNS上で、韓国人日本語学習者と日本人韓国語学習者が行う協働翻訳活動を通して、両言語の相互学習を行っている。具体的には双方の学習者2、3名が日本語漫画吹き出し部の韓国語訳を作成し、他の学習者がそれに対する、疑問、意見などのカキコミを入れて議論を重ね、それを参考にして訳語作成の学習者が最終的な訳語を決定するものである。カキコミ内容を見ると、テンスや格助詞については、韓国人日本語学習者の内省が議論の中心になっているが、待遇表現については、日本人韓国語学習者の韓国の社会文化的知識も議論の中心になっている。以上のことは、SNS上での相互学習が文法項目や社会文化的知識など、様々な点において、学習者の能力を発揮する効果を持っていることを示している。

19. 読解授業の活性化の試み—自律的な読みを促すために—

渡邊芙裕美（慶應義塾大学）

本稿では日本語の読解授業を活性化するために行った活動について報告する。活動は交換留学生などを対象とした中級後半のクラスで実施した。教師が説明してくれるのを待つという受け身の姿勢ではなく、自分から積極的に読んでもらうためにグループワークを中心とした活動を行った。グループワークでは、学習者の中から1名先生役をする学習者を決め、ワークシートを使って学習者同士で本文の内容について質問しあうようにした。会話はすべて録音した。このような活動の中で、読みに対する積極的な姿勢、特にわからないことを積極的に質問する姿が見られた。

20. 談話終結部における文末表現の使用傾向—日本語学習者と日本語母語話者の作文の比較から—

俵山雄司（群馬大学）

日本語非母語話者の書く文章には、段落や文章が適切にまとめられておらず、締まりのない印象を受けるものがある。一方で、日本語母語話者の書く文章では、「と思う」などの思考動詞や「のだ」などが段落末や文章末に用いられやすいとの指摘があり、これらの表現と段落や文章の終結には何らかの関連があると考えられる。そこで、ここでは日本語母語話者（JP）と中国人日本語学習者（CN）の作文コーパスをデータとして、段落末・文章末の文において使用されている文末表現の出現傾向の比較を行った。その結果、以下のことがわかった。①JPは段落末や文章末で思考動詞や「のだ」、名詞述語を頻繁に用いているが、CNはそれほどではない。②CNは「べきだ」「か（疑問）」を比較的好く用いるが、JPは同様の方法で用いることはなく、他の方法を取る。

21. 身体語にまつわる慣用表現から日本語と言語文化を学ぶ授業の試み

堀恵子（東洋大学人間科学総合研究所）

本発表は、文系の幅広い専攻からなる学部2年生に対する日本語と言語文化を学ぶ授業の実践報告である。「日本語と日本文化」と題した授業では、より豊かな日本語を使用できるよう身体語にまつわる慣用表現を自ら調べることに加え、分析結果を発表したり、ディスカッションしたりする中でメタ言語としてのアカデミックな日本語を向上させること、学習に必要なツール、PCスキルについても習熟することをねらいとしている。

●ポスター発表（上記5件を含む16件）

22. 中級学習者への作文指導—学生の「書く意欲」を高める授業—

石塚久与（明治大学日本語教育センター）

中級レベルの学生に対し作文の指導を行なう際の達成目標として、文法の正確さ、表現の適切さ、語彙の適切さ、漢字の正確さ、適切さ、そして「書く楽しさ」と感じさせることが考えられる。特に、最後の「書く楽しさ」を感じさせるためには、「表現したい、書きたい」という意欲が欠かせない。この、学生の書く意欲を上げるための工夫が授業でなされるべきだ。本稿では、実際になされた授業での試みを紹介し、その効果と課題を考えてみたい。

23. 学部留学生を対象とした Moodle を用いた聴解授業の実践報告

渡辺史央・北川幸子（京都産業大学）

京都産業大学における学部留学生対象の聴解授業（1年次秋学期・必修科目）では、2008年度より Moodle を用いた活動を行っている。Moodle とは CMS(Course Management System) と呼ばれる学習支援システムのひとつで、国内外の様々な高等教育機関で利用されている。言語教育の分野では英語教育を中心に利用が広がっているが、日本語教育の分野においてはその効果的な利用方法や対面授業での活用例など、報告はさほど多くない。本報告では、2009年度秋学期（90分×14回）に実践した、ニュース教材を用いた聴解授業について報告する。特に対面授業での教師の役割や、学生間の能力差、あるいは語彙習得の面との関わりを中心に、Moodle

を利用することの利点を整理する。最後に今回は利用しなかった Moodle の機能の中で、Forum 機能と呼ばれる電子掲示板利用の可能性を含め、今後の課題を挙げる。

24. 留学生教育新規参入校の課題と解決策

飯嶋美知子（北海道情報大学）

筆者の勤務する大学では、2007 年度より中国の提携大学からの定期的な留学生の受け入れを開始した。本格的な留学生教育の開始にあたり、主として2つの課題がある。留学生の日本語力不足と習慣の相違に関する問題、学内の留学生及び留学生教育への関心及び認知度の低さである。留学生の日本語力不足に関しては、日本語の授業のコマ数の増加、チューター制度の導入、独自教材の開発で対応する。習慣の相違に関しては、入学時のオリエンテーションや国際交流支援室での指導で対応する。そして、学内における留学生及び留学生教育への関心及び認知度を高めるためには、留学生向けの行事を企画し学内報で周知する、留学生教育担当教員が学内の研修会等の席でその成果を報告すること等で対応していく。

25. 不適切な韻律を誘発し難い「日本語教育用音声・動画教材」の作成とその可能性—適切なアクセントの保持を目指した「新 Te-form の歌」—

西田真里子（札幌国際大学）

「て形」は活用規則が複雑で学習者にルールを定着させるには困難を伴う。そこで、ルール暗記のために歌を用いる場合もあろう。しかし、従来使用の「替え歌」では不適切な韻律を誘発する恐れがある。しかも、指導時は「て形」と「辞書形」のアクセントが異なる点も念頭に置かねばならない。韻律を考慮せずに安易に従来の「替え歌」を使うことは避ける必要がある。本研究は、不適切な韻律が誘発されにくく、楽しみながら自然に学べる「音声・動画教材」の開発を目的とする。その手始めに、適切なアクセント保持を目指した「新 Te-form の歌」を自作した。著作権切れのクラシックと「初音ミク」（音声合成&動画ソフト）を使用したため、mp3 や動画ファイルとして学習者に無料配布可能である。教室のみに限らず、学生各自の携帯 mp3 プレーヤーで他の音楽と同様にいつでも聴くことができ、個別 PC や YouTube 等で画像を繰り返し再生して自主学習が行える。

26. 民間日本語教師養成講座における受講生の学び—グループワークに着目して—

馬場 芽（北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院大学院生）

本稿の目的は、民間日本語教師養成講座におけるグループワーク（以下、GW）での学びに対する受講生の意識を明らかにすることである。半構造化面接によって得られたデータを、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）を用いて分析した結果、当初不慣れな活動に対して戸惑いを感じた受講生は、活発な意見交換や、新たな視点の気づき、他受講生からのフィードバック、他受講生と自分の比較といった GW での体験を通して、GW に対する意味づけを行っているとの仮説が生成された。この GW に対する意味づけは、認知面・心理面・社会面でのプラス評価と、精神的負担や自己評価の低下といったマイナス評価にまとめられた。受講生は、先行研究で示されているような GW の効果を認識している反面、心理的な負の影響を受けていることも明らかとなった。GW 実施に際しては、彼らの志向などを理解し、心理的負担を軽減するような配慮が必要であることが示唆された。

27. 日本語初級下位クラスにおける実践と工夫

渡部真由美（日本学生支援機構東京日本語教育センター）

外国語学習を始めたばかりの学習者がすべて順調に習得を進められるとは限らない。学習の初期につまずいた学生に不足していた主な点は、以下のとおりである。①不明確な部分は文法、語彙、文脈などを手がかりにして推測する ②自分の発話ばかりでなく、相手の発話をモニターして学んでいく ③文法上の意味だけにとらわれることなく、実際の場で使われている意味にも注目する ④自分にあった学習スタイルを見つけ、積極的に学習

を行う ⑤節など大きな単位の形態を習得する これらの問題を解決するため、教師や他の学生による問題行動の指摘や模範となる他の学生の学習方法提示等を明示的に行った。その結果、学生の中には、授業中に出た例文に関連する質問ができるようになったり、他の学生の学習方法を見習おうという意識が芽生えたものがある。外国語学習を効率的に進めるためには、教師やまわりの学生からの学習方法提示が有効に働く場合もあるのではないか。

28. 作文授業におけるシニアレスポンスという試み—学習者の先輩、専門家からのフィードバックとその特徴—

田中典子・近藤行人（名古屋大学大学院大学院生）

本稿は、海外で日本語を学ぶ大学4年生を対象とした作文授業での、先輩や専門家からのフィードバックの特徴と効果について報告するものである。初回の作文授業のあと、学習者の「何のために書くのか」という声を受け、書く動機付けを高めるために、彼らの先輩にあたる日本の大学院で学ぶ留学生に読み手となってもらった。先輩や専門家からのFBは内容や指導的助言などピアフィードバックとは異なる特徴がみられ、内容面、情意面に働きかけるという効果があった。

29. 協働的対話による「地域日本語活動」の意味—「にほんご あいあい」の立ち上げと実践—

福村真紀子（早稲田大学大学院日本語教育研究科 大学院生）

筆者は、幼少の子どもを抱える日本語非母語話者が子連れで参加し、日本語を学習することができる場所が必要だと考える。そこで、2010年2月に「親子日本語サークル」を立ち上げた。サークルの名前は「にほんご あいあい」である。筆者は本サークルの活動をデザインし、活動の運営と進行を行っている。本研究では、本サークルを実践現場としたフィールドノーツを毎回記録した。また、本サークルの参加者へのインタビューを行った。そして、これらのデータをもとにして、参加者にとっての「にほんご あいあい」の意味を分析した。その結果、自然な対話そのものが参加者の協働となることが分かったのである。筆者は本サークルで起こる対話を協働的対話と呼ぶことにした。本研究は、このような協働的対話为非母語話者の日本語学習支援につながり、ひいては共生社会で生活することのエンパワメントになることを示唆するものである。

30. 口頭発表技能の到達目標と学習計画の精緻化を目指したコースデザイン

衣川隆生（名古屋大学留学生センター）・森仁美（名古屋大学大学院生）

自律学習を進めるためには、学習者が学習経験や学習環境、自身の言語能力や学習ニーズなど学習に関わる様々な要因を客観的な視点から意識化する能力、意識化によって得られた情報をもとに具体的で実現可能な形で到達目標と学習計画を立案する能力が不可欠である。本発表では、口頭発表技能の到達目標と学習計画の精緻化を目指して筆者がこれまでに改変を重ねてきたコースデザインを振り返り、その効果と課題を検討する。

31. 学習者同士の振り返り活動を重視した会話授業

山崎真弓・広田妙子・本郷智子（東京農工大学国際センター）

東京農工大学国際センターの会話授業では、学習者が実践した会話タスクの録画データを基に自らの会話行動を観察・分析する振り返り活動を行っている。これまで主として教師対学習者という教室活動の形態で行ってきた上記の活動を、学習者同士の少人数グループによる活動とし、学習者自らが機器を操作しながら会話行動を観察・分析する話し合いの過程を重視した会話授業を試みた。その結果、学習者が観察・分析したい会話行動を自分たちのペースで繰り返し見ながら、重要な会話技能について意見交換している様子が観察され、この形の振り返り活動が、学習者が主体的に会話行動を観察・分析する活動となることが示された。一方で、話し合いの方向性や進み方が適切ではない場合や学習者の参加度にばらつきが見られる場合もあり、活動方法の検討が必要であることもわかった。

32. 「生活者としての外国人」支援における「日本語」の専門性

吉田聖子（あけぼの会日本語教室）

「生活者としての外国人」と「生活者としての日本人」が参加する地域の日本語教室では、これまで「日本語の基礎的な知識」が教えられることが多かった。しかし、「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案についてや「JF スタンダード」、「新日本語能力試験」にみられるように、「生活者としての外国人」の日本語力の評価方法が、「～を知っている」から「～ができる」へ、大きく変わりつつある。これに伴い、多文化共生社会を目指す公的機関が実施する日本語ボランティア養成プログラムで扱う「日本語」の専門性の内容も、「日本語の基礎的な知識」から「日本語によるコミュニケーション能力」へと大きく変わりつつある。今回は昨年度実施された養成講座のプログラムと参加者の振り返りをもとに、新しい「日本語」の専門性について考察する。

【昼食について】

当日は、ポスター発表が行われる W9 号館 1階ラウンジに売店があり、軽食を購入することができますが、大学内の学生食堂の営業がありません。駅のそばに飲食店が数軒ありますが数も少ないので、昼食をご持参くださいますようお願い申し上げます。会場の1階と2階のラウンジをご利用ください。**学内は全面禁煙です。**ご協力お願いいたします。

【懇親会】

閉会の挨拶終了後、E6号館リリーイーストにて懇親会を行います。
ぜひご参加ください。会費は2500円です。

【会場案内】

金城学院大学 W9 号館 1階ラウンジ（ポスター会場）、2階 204 教室（口頭発表会場）
〒463-8521 名古屋市守山区大森二丁目 1723
Tel : 052-798-0180(代表)



【会場までの交通】

[名古屋駅から大森・金城学院前駅まで]

JR 中央線 8 番線から中津川行に乘車し、「大曾根」駅で下車，名鉄瀬戸線・尾張瀬戸行に乗り換え，「大森・金城学院前」駅で下車，徒歩 3～4 分

地下鉄東山線・藤ヶ丘行に乘車し，「栄」駅で下車，名鉄瀬戸線・尾張瀬戸行に乗り換え，「大森・金城学院前」駅で下車，徒歩 3～4 分

[大森・金城学院駅前から会場まで]



1. 名鉄瀬戸線・尾張瀬戸行，進行方向に向かって，前の車両に乗る。
2. 大森・金城学院前駅，北口を出る。
3. 押しボタン式の信号を渡り，そのまま緩やかな坂を登る。途中の分かれ道は左に行く。
4. 右手に金城学院大学のグレーの正門を見て，通り過ぎる。
5. 橋を見たら，右手の建物（赤レンガの建物本部棟）のエスカレーターで2階まで行き，今見た橋を渡って，W9号館まで歩く。
6. 右手にガラス張りのW9号館が見える。

【会費納入のお願い】

JLEM では1月から12月までを会計年度としております。2010年度会費（3,000円）未納の方は早急にお支払いいただきますようお願いいたします。2年分未納の場合は会員資格を失います。会員資格失効後に再度入会される場合には，未納分の会費も納入していただくこととなりますのでご注意ください。会費は，郵便局にて下記の口座に「電信振込」でお振込みいただくか，研究会会場受付にてお支払いください。ご不明な点がありましたら，jlem-ml#tiu.ac.jp（#は@です）までe-mailにてお問い合わせください。

【振込先】（1）郵便局から払い込む場合

記号：10140 番号：69076511 加入者：日本語教育方法研究会

（2）銀行から振り込む場合

銀行名：ゆうちょ銀行

店名：〇一八 店（ゼロイチハチ店） 金融機関コード：9900 店番：018

預金種目：普通（または貯蓄） ※預金種目は「普通」「貯蓄」のいずれでも振込可能

口座番号：6907651

口座名：日本語教育方法研究会